

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第853号 平成26年12月17日

幼き者達の叫びはどこへ消えたのか

私の手元に、昭和39年（1964年）に刊行された古い、古い詩集があります。

この詩集は、タゴールの生誕100年を記念して出版されたもので、当時のネルー首相の巻頭言と共に「新月（幼なごころの詩）」「ギタンジャリ（歌のささげもの）」という2編の詩集が収められています。

今から50年も前、私は高校生の頃で、どのような経緯でこの詩集を手にしたかは記憶にありませんし、色は変色し、如何にも古ぼけてはいますが、「新月（幼なごころの詩）」に登載されている一編一編の詩には、今読んでも、タゴールの溢れんばかりの幼子達への愛がストレートに伝わって来ます。どうすればあんなにも素直に幼子達の心に寄り添えるのか、その表現力に嫉妬心さえ感じます。

最近、親が我が子を虐待し、殺してしまうという悲惨な事件が相次いで発生しています。そうした中、絶望の中で発していたであろう幼子達の心の叫びは、一体どこに消えてしまったのでしょうか。少なくとも、加害者となった親達には全く届いていなかった事だけは、明らかだと思えます。

11月20日大阪府茨木市で、3歳の長女に十分な食事を与えず、育児放棄の末に衰弱死させたとして、義父の大工の男（22歳）と同居の妻で実母の無職少女（19）が殺人容疑で逮捕されました。2人を逮捕した大阪府警は、今年2月以降、長女に十分な食事を与えないまま放置し、6月15日、自宅で低栄養によって衰弱させ殺害したとしている他、長女の顔や頭には打撲痕もあり、暴行が加えられていた可能性もあるとみて調べています。

死亡時の長女の体重は約8キロで、平均体重の半分程度だったそうですし、司法解剖の結果、腸内からはアルミ箔やロウ、タマネギの皮が見つかっており、府警は空腹のために口に入れたとみています。

亡くなった女の子は、どんな思いでアルミ箔やロウ、タマネギの皮を口に入れたのでしょうか。想像するだけで胸が痛くなります。

この子は、きっと、逮捕された2人に対して「どうして私は生まれて来たの」という声なき問いを発していたに違いありません。

親は誰しも、我が子から「どうして私は生まれて来たの」問われれば、きっと「お父さんもお母さんも、貴方が私達のところに来てくれるのを心待ちにしていたからよ」と答えるのではないかと思います。

「わたしはどこから来たの？
どこでわたしをひろったの？」
子どもが お母さまにききました。
お母さまは子どもしっかり抱きしめて
はんぶん泣き 半分笑いながら答えました—
「あなたはお母さまのねがいだったのよ かわいい子。
わたしのところに かくれていたの
あなたはお母さまが 子どものときあそんだ お人形のなかにいたの
毎朝 お母さまが 土で神様のかたちを こしらえたとき
あなたを つくったり こわしたりしたの。
あなたは 私のお家の 神様といっしょに まつられていて
神様をおがむとき わたしはあなたを おがんでいました
あなたは わたしの望みと愛のなかに
わたしのいのちと いっしょにいました
(中略)
あなたの顔を じっとみていると 不思議なきもちにみたされます。
あなたを なくしては たいへんだと
わたしは 胸にしっかり あなたをだきしめます。
このかぼそい わたしの胸のなかに
どんな魔法が 世界でいちばんのたからを もってきたのでしょうか？
(「タゴール詩集『新月』高良とみ訳」から)

ようやく歩けるようになった幼子が一生懸命に歩いて、両手を広げて待っている父親の胸に飛び込んで行く姿を見ると、ほのぼのとした温かい気持ちにさせられます。そして同時に、自分にもそうした時期があったなと、懐かしいような切ない気持ちが湧いてきます。

親の懐に飛び込んで、親からギュッと苦しい位に抱きしめられる、そうした実感は子どもの成長にとって不可欠のものだと思います。

お母さまの やさしい腕につかまえられて
しめつけられるのは 自由よりも ずっと幸せなことを
あかちゃんは ちゃんとしているのです。
(「タゴール詩集『新月』高良とみ訳」から)

食べ物も与えられず、衰弱して死んでしまった幼子には、父親や母親から息苦しい程に抱きしめられた、そんな瞬間は果たしてあったでしょうか。

茨木市の事件では、今年の2月末に、女兒に食事をさせた母方の祖母に女兒の母親が激怒していたという報道もあります。この報道一つとっても、救えたはずの命が救えなかった無力感を禁じ得ません。

こんな悲しいニュースは、これ以上耳にたくはありませんが、そのためになすべき事の大きさに、たじろいでしまいます。(塾頭：吉田 洋一)